



2月を振り返って

2月18日（火）プロアナウンサーであり、様々な企業の経営者を対象にした話し方講座の講師を務められている、大橋照子先生を講師にお招きして「話し方講座及び演習」を行うことができました。毎年受講生には大好評の講座ですが、今年も対面でのコミュニケーションのスキルとマインドについて、多くの示唆を得ることができた講座でした。受講生の感想を載せておきます。

1. 大橋先生の講義、演習から学んだことはどのようなことでしたか。

- 発声は訓練することによって改善できることがわかりました。言葉は人間同士が交わす最も大切なコミュニケーションツールなので、一つ一つの言葉を意識して発音することが大切であるということを学びました。
- 礼に始まり、礼に終わる。時に面接などのオフィシャルな場面では、第一印象が何より大切なので、「よろしくお願いします」「ありがとうございました」の意味をあらわす「礼」は特に大切なものであるということを学びました。
- 表情・言い方1つで受ける印象が全く違ってしまふことが実感できました。

2. 個人面接演習から学んだことはどのようなことですか。

- 質問に対する回答は、強く、短いほどメッセージとして伝わるということを学びました。
- 緊張してしまうことは自然だけど、緊張を取り除くための方法があることを知り、自分も取り入れていこうと思いました。
- 自分の「強み」をしっかりと意識してアピールすることが大切であることがわかりました。特にピンチを乗り越えた経験や、逆境を克服した経験は最強の武器となることを感じました。
- 自分は昔から声が小さく、小学校2年生の時、担任の先生から「おなかから声を出しなさい」といわれたことを思い出しました。この経験を生かし、自信をもって声が小さくならないように意識していきます。



3月の予定

個人面接演習が始まっています。すでに演習に参加した人もいますが、3月も4日（火）5日（水）10日（月）11日（火）12日（水）の日程で演習を行います。まだ受講枠には余裕がありますので、参加希望がある方は早めに教職課程センターに連絡し予約してください。また集団討論演習も設定しています。こちらは4人以上そろった場合に実施します。日程は3月17日（月）～3月26日（水）です。特に埼玉県、千葉県・千葉市での選考受験を考えている方は、この機会にぜひ参加してほしいと思っています。

★個人面接演習

2月25日（火）～3月12日（水）西館演習室1

★集団討論演習

3月17日（月）～3月26日（水）西館演習室1

（１）教師という役割とは

歌人の俵万智さんは、神奈川県立橋本高校の教諭であった 1987 年に、口語短歌の歌集である「サラダ記念日」を発行し、おそらく歌集としては、当時初めて 250 万部を超える大ベストセラーとなりました。その「サラダ記念日」の中の「橋本高校」と題された一連の作品の中に「出席簿、紺のブレザー空に投げ、週末はかわいい女になろう」という歌があります。この歌が象徴しているように、私たち教師が《教師である自分》を象徴する何かを「放り投げたい」「脱ぎ捨てたい」という衝動に駆られることは、決して特別な感情ではなく、教師ならだれでも持っている感情だと思います。恐らくこの感情は「せめて週末くらいは教師の顔を脱ぎ捨てて自由になり、自分の顔で生きよう。そうしなければ自分が持たない！」あるいは「このまま生徒の期待に応え続ける教師を演じ続けるのはムリ！」というある種の危機感に近いものだと考えています。

さて皆さん、世の中にある様々な職業の中で、その職業を遂行する上で求められる役割や振る舞いを、これほどまでの危機感を持って「捨て去ろう」と思わせる職業が他にあるでしょうか。私も現職時代は、週末になり帰宅する電車の中で「ほっとして緊張がほだけていく感覚」をよく感じていましたし、オフの時には、わざと学校のことは考えないようにして、何か他のことに集中して一度頭の中から「学校」を追い出すようにしていました。ではこのように意図的に「脱ぎ捨てなければならない」教師という役割とはいったいどのようなものなのでしょう。



（２）家でも『先生』している・・・

今まで数多くの三者面談を行う中で、たまたま保護者の職業が教師だったケースが何回かありました。その面談の中で、教師である母親が、子どもに口うるさく指導する態度に対し、ストレスが限界に達した子どもの口から「**お母さんは家でも先生している！**」という言葉が発せられたことがあります。子どもがこの「先生」という言葉で表そうとしているのは、もちろん日常の些細なことすべてにいちいち口うるさく指示を出す教師の姿です。言葉を変えれば「自分らしく振舞えない」「気ままに行動できない」「自分らしい行動が許されない」と言った息苦しい状態、ということが出来るでしょう。せめて家にいる時ぐらい素の自分をさらけ出してもいいじゃないか！という子どもの不満を感じ取ることが出来ます。

対応としては、もし子どもが未熟な振る舞いをしてしまったときには、親も子どもと一緒に楽しくなり、もし子どもが間違いや失敗をして落ち込んでいるときには、「私もよく同じことで悩んでいたんだ、人間ってうまくいかないよね」と一緒に愚痴をこぼしたり、「こういうクセはきっと死ぬまで治らないんだよね」などと、大人の不十分さを出したうえで、「それでもあなたを応援している」というメッセージを伝えることで、自分と子どもの心を同時に包みながら、子どもを温かく支えることが可能です。

しかし、「家でも先生している」と子どもが叫ぶようなときの親は、あまりこのようなフォローをせず、むしろ子どもを叱責しさらなる非難を浴びせたか「舌打ち」「しかめっ面」「不機嫌な表情や気分」を前面に出すことで「お前は未熟で弱い」という否定的なメッセージを子どもに突き付けている時なのでしょう。子どもにとっては「自分そのものを認めてもらえずに否定された」「一番大切な部分を認めてもらえずに息が詰まっていまいそう」といううめき声とともることが出来ます。きっと皆さんにも過去に思い当たる節があるのではないのでしょうか。



（３）教師という役割が抱えている危ない力学

このように、子どもを否定的にとらえる親の在り方を「先生している！」という言葉で表現する、という事の意味を考えてみましょう。

- ① 第一は、「こうでなければならない」という規範意識を強く一方的に子どもに押し付けて、型にはめ込もうとする教師の姿です。
- ② 第二は、教師の側から子どもとの間に一線を引き、強い力を持つものとして君臨し、上から目線で子どもを締め付けるといふ「支配 ➡ 服従関係」です。

私たち教師は無意識のうちに、今まで示してきた「教師としての役割」を果たそうとして自分自身を追い込んでいる部分があります。例えば「正しいことを教えなければならない」「しつけをしなければならない」「より良い行動をとらせなければならない」「言い聞かせてわからせなければならない」「静かにさせなければならない」など様々な規範意識（～させなければならない！）にがんじがらめに縛られてしまつて、**常に自分の思い通りに子どもや集団を動かそうと焦り、結果として思い通りにならない子ども達にいらだち、さらには思い通り動かせない自分に対して無能感（私は教師としては失格だ！）を募らせてしまうのです。**そんな精神状態で子どもに働きかければかけるほど、さらなる反発を招き、それが結果として教師のいら立ちと無能感を増幅させるという悪循環に陥ることになります。

（４）子どもの個性を楽しむ

社会が求める（この価値観も時代とともに変化していますが・・・）「あるべき人間の姿」に向かって子どもたちを教え導く、という教師の役割には、実は上記の様に、こわばった杓子定規的で威圧的な指導の中に自分を追い込んでいく、という危険性を孕んでいます。常に一定の価値基準に照らし合わせて、「あるべき姿」VS「ありえない姿」、「良い行い」VS「悪い行い」、といったステレオタイプな価値判断を通して子どもたちを評価する、と言った行動様式に陥りがちなのです。（私自身の反省です・・・）

このような行動様式に陥らないようにするためには、時には「教師の役割」を脱ぎ捨てて子どもと同じ目線で子どもたちの中に入り、一緒に活動することが大切です。「昼休みに一緒に遊ぶ」「給食の時間に好きな食べ物の話で盛り上がる」など、普通のおじさん、おばさん（お兄さん、お姉さん）に戻る時間も必要です。そんな時間を共有することで、一人一人の子どもの個性に気づき、認め、それらを慈しむ気持ちを育てていくことは大変重要です。**「教師の役割」と「子どもたちを慈しむ心」は矛盾するものではありません。両者は意識的に、自分の心に共存させておくものです。この両者のバランス感覚は教師にとって、とても大切です。どちらかに偏りすぎてはだめなのです。**



しかし、ふと気が付くと「先生やってる！」ことが多いのが現状ではないでしょうか。場面や状況に応じて**「教師としての役割を果たす自分」「人生の先輩としての自分」「同じ失敗をしながら成長してきた自分」**を使い分けて子どもたちに接していきましょう。今のあなたは上から目線ばかりに偏りすぎていませんか？ 教育実習前に一度見直してみてください。

（５）なるほど そうか すごいなあ・・・

新任教師にとって「指導する」ということが「要求する」「しつける」「指示命令する」ことに置き換わっていることが多々あります。つまり自分は教師なんだから目の前の子どもたちに「働きかけて」「指導しなければならない」という使命感が先走ってしまうのです。しかし残念なことにそんな「指導」には子どもたちは従おうとはしません。



子どもたちは、教師に受容されることを期待しています。「僕の話

を聞いてほしい」「私の活動を見ていてほしい」と思っています。ところがそんな気持ちに気づかずに一方的に指示を出しても子どもたちにはストレスがたまるだけです。まずは教師が良き「聞き手」になることです。そして聞き手として、重要なポイントが『なるほど、そうか、すごいなあ・・・』です。**教師が大きくなずきながら、子どもたちが 発する思いを受け止めることで、子どもたちは伸び伸びと、自分で自分を高みに押し上げていきます。**『なるほど、そうか、すごいなあ・・・』で子どものやる気を引き出していきましょう。

私たち大人にとって、子どもはどうしても不完全な存在に見えてしまいます。しかし、考えてみれば私たち大人もまた不完全な存在なのです。大切なことは、**「大人も子どもと一緒に成長していくんだ」という気持ちを持つことです。私たち大人も努力している！という姿を見せることは、子どもたちからの新たな信頼を生み出します。**

子どもの不完全さは、決して非人間的なことに根ざしているわけではありません。それは人間だからこそ持ちえる「つまずき」「あやまち」「よりみち」そして「まよい」なのです。しかしどんなときでも私たち大人が、子どもたちを人間として大切に扱い、彼らの成長・発達を信じ、内に秘めている未知の可能性が開花できるように力を合わせていこうではありませんか。「子供」と書いて「未来」と読みたいですね。「中高生」と書いて「可能性」と読みたいですね。自立へのステップを踏み出した子どもたちのために、私達教師ができることを考えていきましょう。子どもたちの自立への道筋を考え続けることが、私たちに与えられた責務です。そして卒業式で子どもたちは「自信と成長」という大きな成果を私たちに返してくれます。

（６）教室の中は「あじさいのお花畑」と思いたい

あじさいの一つひとつの花は、本当はとても小さい花です。たくさんの花が寄り集まって美しい花となります。よく見ると一つひとつの小さな花は、微妙に異なる色をしています。それでいて全体として何とも言われぬ美しい花です。そんなあじさいのように、子どもたちが個性を輝かせながら生き生きと活躍できるクラスを作りたいですね。



シリーズ【私が出会った忘れられない生徒たち】（最終回）

長年教師をやっていると、一生忘れられない生徒との出会いもあります。今月は最終回なので【私が出会った忘れられない生徒たち】の中でも特に印象に残った生徒たちを紹介します。まだまだ紹介したい生徒はたくさんいるのですが、最終回に私が選んだのは「夢を追い続けてかなえた生徒たち」です。どんな生徒たちだったかと言うと・・・

管理職になる前、最後に担任をした中学校 1 年生のクラスに Y さんという女子がいました。まじめで人一倍努力を惜しまない生徒でした。入学時に書いてもらった「将来の夢」の作文には、「私は CA（キャビンアテンダント）になって、世界中の空を飛び、お客様に喜んでもらえるようになりたい」と書かれていました。翌年私は学校事情で別の学校に異動となり、その後 Y さんと会うことはなかったのですが、Y さんには 3 つ年上の K 君という兄がいて、K 君は後年私と同じ中学校の教員になったのです。教員同士なので研修会などで何回か姿を見かけることもあり「そういえば妹の Y さん、今どうしてる？」と聞いたところ、「夢がかなって CA として航空会社に採用されて、今研修中です」とのことでした。私は「中学生の時から夢がかなってよかったね」と伝えてほしいと頼んでその日は終わりました。

数年後、私は校長として新しい学校に赴任しました。私は副校長時代から、中学校 3 年生の卒業式直前に、全クラスで授業をさせてもらうことにしていました。その年も、卒業を控えた 3 年生のクラスで、キャリア形成についての授業をさせてもらい、「人生浮き沈みはあるけれど、どんな時も夢や目標を見失うことなく進んでほしい」という願いを伝えました。そして迎えた卒業式の朝、R さんという女子生徒がわざわざ校長室を訪ねてきてくれて、「校長先生にお手紙を書いたので後で読んでください」と手紙を渡されました。卒業生の中には、お世話になった担任の先生に手紙を渡すことはよくあるのですが、校長に手紙を書くということはあまり聞いたことがありません。卒業式が終わり、生徒たちが全員下校した後、校長室でその手紙を読みました。そこには「最後の授業ありがとうございました。夢を持ち続けることの大切さがよくわかりました。実は私には CA になるという夢があります。でも今はまだその夢が実現できるかわかりません。でも校長先生の言葉を信じて努力していきます」と書かれていたのです。手紙を読んで、私は目頭が熱くなり 10 年以上前に同じ夢を持ち、その夢をかなえた Y さんのことを思い出したのです。しかしちょうどコロナが広まり、緊急事態宣言が発令されたタイミングだったので、2 人をつなぐことはできませんでした。



現役国際線 CA の Y さん、大学時代の R さんと

ところがおとし R さんから連絡が来て、そこには「私は今年大学 3 年生になり、今就職活動をしています CA になるという夢を持ち続けて頑張っています」とのメッセージがありました。コロナも収まっていたので、「それなら教え子で現役の国際線 CA の Y さんを紹介します」と返信し、一月後に R さんに Y さんと直接会ってもらう事にしました。当日やや緊張した面持ちの R さんが待ち合わせの場所に来てくれて、Y さんから仕事の話やどうやって夢を実現させたかなど、たっぷりとお話を聞かせてもらうことができました。さらに一年後、

今年になって R さんから「夢がかなって航空会社に就職して、CA として勤務することが決まりました」との連絡がありました。若者が 10 年以上夢見て、努力し続けた結果として掴んだキャリアです。これほどうれしいことはありません。そんなキャリア形成に関われたことは、私の教師人生の中で、本当にうれしい経験となりました。現職教員を引退した身ではありますが、これからも引き続き、若者たちの夢の実現を応援していこう！と私に決意させてくれた出来事でした。

今教職の現場はブラックだとして、現職教員たちが様々な声を上げています。文科省が「現職の教員たちにもっと教職の魅力を発信してほしい」と思って始めた X (旧 twitter) #教師のバトン は、文科省の意図に反し、現状に不満を持つ教員たちの悲鳴にも似た叫びで大炎上しました。教員採用選考の倍率も低迷し、各自治体が欲しい人材が集まらないという深刻な現状に陥っています。危機感を持った文科省や中教審も、遅まきながら教員の働き方改革を口にするようになりました。しかし教員による部活指導に象徴されるように、今まで 50 年以上給特法の下に運用されてきた「教師の善意による時間外勤務」に依存してきた状況が、すぐに改善することは難しいのが、今の教育現場の実態です。

しかし私は、そんな時代だからこそ教育が果たすべき役割もまた、今まで以上に重要なのだと考えます。当たり前ですが子どもたちを育て、社会において大切な価値観を身に付けさせることが教育の役割です。しかし残念ながら保護者の教育力が著しく低下している現在では、そんな教育の役割を果たすことが出来る「教師の指導力」こそが、子どもたちの健全な成長に欠かせない「最後の砦」なのです。

そんな時代背景もあり、教師による子ども達への指導は、明るい未来を創るために必要不可欠な取り組みと言えるでしょう。今教員を目指している学生の皆さん、また初任校で日々試行錯誤を繰り返している教員の皆さんには、自信と誇りをもって、そんな教育の最前線に立ち続けてほしいと願っています。

今教育 DX はやっと動き始めたばかりです。近い将来 AI を活用した指導も当たり前になるでしょう。今教育会はこの大きな変革の波を乗り越えられるかどうか、試されています。この不確定だけど可能性にあふれた未来を切り開き、先頭に立って子どもたちを導くことができるのは、これから現場に出て活躍する皆さんの世代です。これからの教育に求められている人材は TEACHER としてだけではなく、AI を活用した教育 FACILITATOR なのです。法政大学小金井キャンパスの教職課程を履修した皆さんには、その資格があります。本学で学んだスキルやマインドを存分に発揮して AI 時代の教育をリードしてください。



～ROAD TO GREAT TEACHER～
～AIM TO FACILITATOR～

今の教師に課せられた役割は、非常に多岐にわたり、また人間相手の仕事なので、精神的ストレスが大きいことも事実です。しかし子どもたちの成長に直接関わり、間近でその成長を感じられる喜びは、そんな苦労をはるかにしのぐ価値があると、私は考えているのです。

皆さんが進もうとしている教職への道は平たんな道ではないかもしれません。しかし、いつの時代でも未来を切り開いていくのは、子どもたちです。子どもたちこそが可能性であり、明るい未来を実現させてくれる原動力です。そんな子どもたちの成長を支援できることが、私たち教師の醍醐味です。教職は人生を賭けるに値する職なのです。

医者が人の命にかかわる仕事であるならば、教師は人の人生に関わる仕事、と言えるでしょう。

若い皆さんには、ぜひそんな崇高な使命を果たすことが出来る教職に、誇りをもって邁進してほしいと願っています。ぜひこれからも GREAT TEACHER を目指してください。この教職課程センター通信を手にとっていただいた方が、一人でも多くプロ教師として活躍してくれることを心から願っています。



3年間お世話になりました。皆様のご発展を、心よりお祈り申し上げます。 齋藤 道